

第9回医学ジャーナリスト協会賞受賞作品に加筆

冤罪をほどく “供述弱者” とは誰か

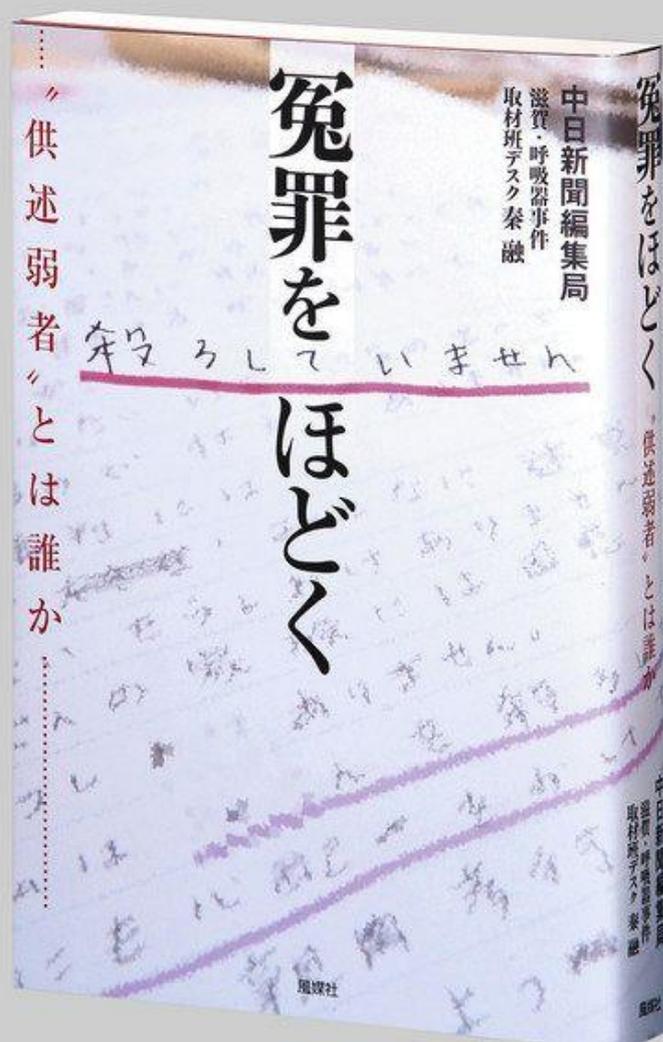
中日新聞編集局、秦融著（風媒社）

1980円

◆司法の悪弊 地道に暴く

[評] 青木理（ジャーナリスト）

【東京新聞ウェブ 2022年1月23日】



本書は、滋賀県の病院を舞台として二〇〇三年に起きた冤罪事件の真相を追い、捜査当局が冤罪を作り出してしまう構造問題に迫ったルポルタージュである。と同時に本書は、調査報道でそれに肉薄する新聞記者たちの取材活動を描いたメディアの内幕ドキュメントでもある。

冤罪発生メカニズムについては、評者の私も過去に多くの冤罪事件を取材し、この国の刑事司法に巣くう悪弊を痛感してきた。密室で延々と続く取り調べ。容疑を否認すると保釈を得られぬ人質司法。検察や警察が独占してしまう証拠。検察に追従してばかりの裁判所。ほかにも先進国では稀（まれ）な代用

監獄など悪弊を挙げればキリはないが、本書は「供述弱者」の存在に焦点を当てる。

発達障害などで取り調べに迎合してしまう者たちがいて、捜査がそこにつけこみ、あるいは乱暴に「自白」を強要し、調書主義と検察追隨に毒された裁判が易々（やすやす）と認めてしまう。足利事件などにも通じる重要な論点を本書は提示する。

一方で本書が自ら赤裸々に描く新聞記者たちは、組織につきもののルーティンワークなどをこなしつつ、捜査に漂う歪（ひず）みと被疑者の叫びに反応し、そして権力監視というメディアの責務に忠実に、事件の真相へと肉薄していく。その作業は決して華やかでも派手でもなく、地道な取材と経験と人脈のみが頼り。

ただ、地道な取材を着実に積み重ねると、いつしか闇を突破する光が見つかり、実際に闇は突破され、記者たちは闇の奥にある真実にたどり着く。しんどくても、自らの熱意と好奇心と問題意識のみに依（よ）ってそれを成し遂げるのだから、これほど楽しくてやりがいのある仕事はないと本書は教えてくれる。

願わくば、メディアを志望する学生や若きメディア人にこそ本書を読んでほしい。新聞を筆頭とする既存メディアは斜陽が指摘されているが、こうした記者たちの存在がなければ、歪みは放置されたまま社会は闇に包まれてしまうのだから。

殺人罪で十二年服役した元看護助手を再審無罪へ導いた調査報道を、取材班デスクだった元本紙編集委員が振り返る。

「自白」導いた 異様捜査

【評】 ・堀川恵子（ノンフィクション作家）

【読売新聞ウェブ 2022/02/25 05:20】

◇はた・とおる＝1961年生まれ。元中日新聞編集委員

◇中日新聞＝名古屋市に本社があるブロック紙。

罪なき人が「自白」し、その調書に署名までする。昭和の昔話ではない。事件の解明に取り組んだ報道チームのデスクが「供述弱者」という新たな視点から、正義の天秤が狂うさまを浮かび上がらせた。

2003年、滋賀県の病院で入院患者が亡くなった。翌年、看護助手の西山美香さんが殺人容疑で逮捕され、懲役12年の刑に服した。再審で無罪となったのは2年前のことだ。

記録に残る取り調べの異様さに目を疑う。逮捕前、西山さんは呼ばれもしない警察署にすすんで通った。刑事さんは「あなたはかしこい」と^ほ誉めてくれる。初めて友達ができた気がした。導かれるまま「殺人」を自白。現場検証の前には刑事さんと「予行えんしゅう」。送検されるときは刑事さんと離れたくなくて抱きついた。

鑑定書によれば西山さんは発達障害を抱え、軽度の知的障害もあった。社会生活はなんとか営めるが、生きづらいことの多い「グレーゾーン」。学校や職場で孤立するうち、他者に迎合して生きる^{すべ}術が身についた。

確定判決は患者の自然死を認定した。「自白」は矛盾だらけ。証言のほころびを補強する供述調書は38通、自供書は56通にのぼる不自然さ。決定的な解剖所見も再審まで見逃された。

元厚労省の村木厚子さんは、同僚が次々と虚偽の調書に署名した現実から、社会経験のある人でさえそうなることを強調する。自白の偏重、鑑定の軽視、証拠の非開示。いわれて久しい司法の闇に弱者がはまればひとたまりもない。発達障害と^{えんざい}冤罪の問題は、まだ氷山の一角すら表れていないのではと著者はいう。

「私は殺ろ（ママ）していません」。西山さんが獄中で書いた350通余の手紙は心ある人々を動かした。^{くだん}件の刑事はその後、刑事課長に出世したという。冤罪を生み出すのは人間、それを解くのもまた人間の営み。神ならぬ人が人を裁くことの危うさがそこにある。